

保 育 の 手 帖

「幼稚園教育と道德教育」について文部省の上野氏がかいておられる。先ごろの校長会の時にも議題となつてゐることである

し、教育それ自体はもちろんのこと、大きな社会問題も含んでいる事からである。一、学校教育における道德教育強化の要請、二、幼稚園教育における道德教育、に分けて述べておられる。基本的行動様式、しつけの徹底は道德教育上きわめて重要な基礎的問題であり、学校が中心となつて家庭や社会の協力を求めて、その充実を図らざるを得ない。幼稚園教育においては、幼児の発達段階からみて、幼稚園教育要領に示された目標それ自体が、直接あるいは間接的に道德教育に関するものであるといわ

れている。幼稚園教育においては、道德教育は日常あらゆる面に教師が心を配つていふと思うが、文部省の方の立場からかかれたいものは、一読しておいてよいと思う。

「幼児の絵」霜田氏、三回にわたつてかかれたもので、今回で終る。たしか一回目を紹介したと思うが、今回は幼児の絵の問題についてどのように考えていったらよいのか、幼児の絵はどのように導かれるべきであるか述べられている。今後、指導の実際にあつて考えさせる問題を含んでゐるが、最後に創造を培う教育の重要性にふれ「絵は上手にかかなくともよい。下手でもよいから、人まねでなしに、自分で工夫して、自分の考えたように描くものだ。そういうように描けるのが偉いのだ」と、子どもに対して出来上りのよい結果を求めないで、自分の考えで工夫したものは、下手でも大いに賞め、奨励すれば、型から脱却して創造的な絵を描くようになっていくであろうと結ばれている。この点は、父兄の方

にも読んでいただきたいものである。

保 育

前号に続き、視聴覚についてはテレビについて「テレビジョンの聴視指導」(阪本越郎)「テレビを囲んで」が参考となるであろう。

最近、テレビ利用も保育案の中に現われているが、私どもも、われわれ個人の知識だけで、ただ利用しているにすぎない場合が多い。

テレビの教育効果、テレビ聴視指導と保育計画、指導上の留意点など、読むと、知っているようなまた知らないような点がある中で、はつきり整理されて、テレビ利用にも力づよさがわく。またよい教育なることはよく理解できるが、これでよいかという迷いはつきりとされ、何かと私どもに参考を与えてくれる。

次に目を引くのは保育所の目録である。

「保育所の歩みと現況」「職場託児所」「保育所と保母」「保母の生活調査を顧みて」「保育所の給食献立」というように、保育所のさまざまなことがらをあげている。同じ使命にはげむものには、疑問も困難も、努力も喜びも皆ひとしいものではあるが、幼稚園とはまた環境が違う保育所の生活もお互に理解し、違う環境のことをのぞくことも一つの勉強になるであろう。

幼児の指導

今月は特集として、変りつつある幼児向けレコードをとりあげている。視聴覚教育と幼児向けレコードの推移について、西山昭二氏、地方のリズム指導講習会場を廻って、増子とし氏、リズム指導にレコードをどう利用したらよいか、渡辺茂氏が、それぞれの立場でのべられているので、レコードによるリズム指導の参考になるであろう。

美しい芸術に恵まれた国のイタリアの子どもについて、菊野正隆氏が書かれている。知らない国のことなのでおもしろく読めるが、考えさせられる問題を持っている。イタリアでは小学校がひけると、親が子どもを迎えにくく風習がある。またイタリア人は家庭と生活をたいせつにしている。そのため昼食時にはどんな人でも家に帰って食事をする。それで午後三時頃までは会社・銀行・工場・研究所などどこでも閉まってしまふ。子どもの性格の基本的な型は、大体学令前に家庭で形成されるといわれているので、このような風習が子どもの教育上いかなる影響を与えるかという点で重要なことと思われる。なお生活の中に音楽があり、芸術的な環境で子どもは育っていることや、子どもは甘やかされて育っていないのでしつけは厳しいことなど、具体的に示されている。イタリアの子どもの幸福は、すべての人がまず家庭を、自分の生活を第一主義的に考えているからではないか

と思われる。日本の一般の人、とくに男の人がもつと家庭のこと、子どものことを考えて欲しいということが、イタリアをみて来た著者の感想であると強調されている。上沢謙二氏の「ノートしてから、きめてから、」は、自分をふりかえてみるのよい機会を与えてくれると思う。

幼児と保育

今月の特集は「幼児は文化的にそだっているか。最近の「道徳教育旋風」のかげにかくれてしまったような観があるが、それだけに、このテーマがとりあげられていることに意義を感じる。

共同研究「幼児をとりまく文化的環境」では、「おもちゃ・歌、遊び場所」と三つの面からとりあげられているので、少しものたりない気もするが、コマ・シャリズムに支配されている現状がよくわかる。終りに「自分の家の子どもだけ可愛がってはいは

子どもの幸福は得られない。皆で手をつないでみんなの子どものために努力しよう。そのために話し合う機会をもとう。」と呼びかけていることはうれしい。

「絵本のえらび方あたえ方」も、今まで何げなく買ひ与えていた絵本を評価しなおすのによい参考となる。

「進歩してきた育児用品」も、使いなれてきた道具が大いに工夫改良の余地のあることを示唆してくれる。

「子どもの仲間」(品川孝子氏)も子どもの社会性についての漠然とした知識を整理するの役に立つ。

その他「映画鑑賞教室」や「話題」欄で人種問題を取り扱うなど、とかく忙しさに追われて、視野の狭くなりがちな母親や教師にほしい幅の広さである。

保育ノート

特集「神経質な子ども」

ふだん子どもの姿を評するときちょっとした気持で「神経質」ということばをしばしば使っているけれども、考えてみるとたいへんあいまいなことばである。これは子どもの状態であるから、それをひき起しているところの原因を考える必要がある。

巻頭では池田教好氏が「子どもの神経質とはどんなものだろうか」という題で、神経質というのはどんな状態・現象を意味しているかということ、精神医学の領域からと常識的な意味、使用法をあげている。

そして神経質の原因として、
1、過敏性情動質 2、子どもの神経衰弱
3、てんかん性かんしゃく 4、特定の心理的原因によるもの 5、感情の発達不全
6、劣等感の強いことからくる場合
をあげている。「原因は個人により異なるが、性格形成上これは決して好ましい傾向ではないから、原因を正しく知った上で注意深い指導・治療が必要である。」と述べている。

また医学的の立場から「神経質な親と子について」(平井信義氏)がのべられている。

さらに「子どもを神経質にする保育」(牛島義友氏)では、子どもを教育的にそだてるためには適度の教育的刺げきを与えなければならぬのはいうまでもないが、また反面神経質の子どもを生み出す可能性もあるから、個性の条件や親の態度・家庭のふんい気・子どもの健康や体力・知能性格などを知った上で個性に即した教育をする必要があると述べている。そして一せい指導
よるためにできやすい犠牲者に対する治療は、保育の片手間ではむずかしいので、
専門家と相談することが望ましいといっておられる。

母の友

表紙いっぱい子どもの顔が描かれていて、やわらかい感じのする雑誌。六六頁の手ごころな厚さ。ひよいと手にとって開いて

みると、なかなか面白くてやめられずに、つい手揚げの中にしのばせて、電車の中や人を待つ間など読み耽ってしまう雑誌である。

誌名は母の友。そして傍に——幼児をもつ母親の雑誌——と副題がついているが、この誌名は実に本誌の内容を言いあらわしていると思う。

四、五、六歳ぐらいの幼児をもつお母さんの、困っている問題や知りたかと思っている事がら、興味のある記事などが満載されている。

試みに十一月号を例にとろう。この月の特集は、反抗する子ども。

我が子の反抗期白書、の題の下では、松村康平氏、古川原氏、川田百合子氏、品川不二郎氏、辰見敏夫氏、早川元二氏、などの心理学者・教育学者・教育実家などが、日々起居をともししている目の前の我が子の反抗期の実状を語って、反抗期の意味・心理的教育的なその意義、さらにその導き

方などが、平易にわかり易く説かれていく。

次の「十字路に立つ子ども」では、反抗する子どもをもって悩んでいるお母さんと、これらおおぜいの子どもの扱って、いろいろの経験をもつ保育園の園長さんとの対談。

その他、一ヵ月分の童話（これは現場の先生方や、お母さんから寄稿されたもの）が載っているが、毎日、お話をしてとねだられて、話のたねに行き詰っているお母さんにとっては、どんなにか重宝で役に立つことであろう。

なお、子どもの病気のこと、問題の子どもの診療室、動物の母性愛について、嫁と姑との問題などがあって、お母さんにはもちろんのこと、幼児の先生にとってもおもしろく教えられることが多い。

幼児の教育 第五十七巻 第二号

◎ 定価 五十円

昭和三十三年一月二十五日印刷
昭和三十三年二月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願い致します。